

Title	日本文化史點描(西村眞次著, 東京堂發行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.159- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本、高山寺本等があるが、孰れも原本の所在はわからない。古鈔本として現存するものはこの觀智院本だけである。

和名抄や、新撰字鏡、色葉字類抄、篆隸萬象名義等が既に複製刊行せられてゐるのに、類聚名義抄のみは幾回かの計畫はなされたさうであるが、遂行に到らなかつたことは寧ろ不思議な位であつた。然るに今度貴重圖書複製會よりこの觀智院本全部が美事に複製刊行せられたことは欣快に堪へない。始めて類聚名義抄を世に知らしめたのは伴信友であるが、其後黒川春村も小杉樞邨もこの書を自ら校合し詳細な點に到るまで注意をはらつてゐる。然も集録した語數も和名抄等に比して極めて多いにもかゝらず、和名抄に於ける箋註の如き大著としても現はれず、其後も割合に等閑に付されてゐるのではあるまいか。それは傳寫本も多くなき、異本も少ない爲でもあらう。又觀智院でも極めて秘藏して仲々みせてくれない爲でもあらう。幸にも我慶應義塾の圖書館には阿波國文庫舊藏本がある爲、博物館のガラス越しにみた記憶を時々この本で新にしてゐたのであるが、今現代科學の力によつて、原本の眼前に髣髴たるは驚く他ない。勿論觀智院本は必ずしも高山寺本等に比して極善本といへず、誤寫と思はれるものも尠からずあるが、現存する唯一の完本であることが何といつても他の諸本に勝るものである。

我々が根本史料を繙くに當つて最も困難を感じることは、同じ文字でありながら、その文字が現在意味する内容と、かつて意味した内容との間に相當の相異が生じ、該史料の作製せられた當時その文字の意味した内容が、現在の我々の智識を以ては解し難い

といふ點であらう。今私はここに『活動』といふ言葉を想起する。この言葉が極短期間であれ、ムーヴィングピクチャーを意味し、現今では又同じ内容を持つ『映畫』といふ言葉の方が一般に行はれやうとして居る。もしこゝでこの『映畫』を意味する『活動』なる語が自然に消滅したならば、必ずや後世の人々は我々が源氏物語に於てなしたと同様な手間と努力を以て明治大正時代の小説に註することにもならう。和名抄や類聚名義抄等が現今残つてゐる爲にこんな言葉を我々は如何に知り得たか計り知り難いものがある。更に類聚名義抄には漢字の異體を極めて豊富に掲げてゐる事、或は又處々に散見する假名の古體等も總て研究の對象ならざるはない。

最後に希望として申し述べたい。切角觀智院本を複製刊行した上は、更に其他の異本もこの際、追加刊行して欲しい。山田博士も解説に三四例擧せられて居る如く、高山寺本の如き特に類聚名義抄研究の上には缺く可からざる本である。周知の如く高山寺には玉篇・篆隸萬象名義・和名抄等文字に關する特異の書物を藏してゐた點等を考へると、決して偶然にそれ等を持ち合はせたと信じ難い。そんな意味からも是非此際敢行して欲しい。(保坂三郎)

日本文化史點描

(西村眞次著
東京堂發行)

著者の最近發表された短篇を集録されたもので、巻頭には曾つて「日本研究」に掲載された「邪眼厭勝としての石敢當」が掲げられてゐる。これには同論文發表當時本誌に一言述べたことがあ

るので此處には省く。次は「石敢當追考」で鹿兒島の石敢當に就て述べ、第三には「古代の社會救濟事業」として行基の布施屋に就て述べ、第四には「中世の漂泊民衆」として傀儡子がジプシイの様にコーカシヤ系印度種で、我國に原史時代以前に渡来したものであらうと云ふ可成大膽な推測が下されてをる。然し之の言語的の證據は未だ充分に吾人を納得せしむるに至らない。第五は「文藝を通して觀た平安時代晩期の社會相」であり、玉葉と方丈記とを比較し、第六は「羅馬加特力教徒の執拗な信仰傳承」で珍奇な資料を紹介し、第七は「下り酒情調」として江戸時代に於ける酒趣味の變遷、下り酒の移入經路等を論ぜられてをる。

何れの諸論も極めて快明平易に記されてをるので讀者は氣輕に讀了することが出來、著者が廣大な分野に汎る智識慾の持主であるのに驚くだらう。趣味的の讀物を漁る讀書子に本書を推薦したい。(松本信廣)

萬 物 流 轉 (平泉 證著 至文堂發行)

平泉博士には「我が歴史觀」なる舊著がある。本書は名前こそ「萬物流轉」であるが、その實博士の人生觀であり歴史觀である。さて

「我等は既に、長柄の橋の盡きたるを見、不破の關屋のあれ果てしをなげき、永遠の都羅馬の地下に埋れ、不朽の神殿パルテノンの荒廢に驚き、萬物流轉の説、之を希臘の哲人に聽き、諸行無常の教、之を印度の佛陀に知つた。人生かくの如し。歴史かくの如し。

靜に人生を觀じ、歴史を思ふとき、パンタ・レイ (Panta rei) の一語は、動かすべからざる鐵則として、歴史を貫通し、人生を支配せるを知らう」

と、無常の嵐はすべてのものに吹き荒む。希臘二千年の歴史も、その後同一の人類にして、しかもその變移に驚かされないものはない。外國に壓迫せられ、病魔(ペスト)に侵され、異民族(スラヴ族)に侵入せられて、たとへその血統は先祖より傳はつてゐるにしても、その優れたる力は遂に見る能はざるに至つたのである。

萬物流轉、あわたゞしき變幻のうちに、我等は茫然自失すべきか。否、我等は流轉のうちに在つて不易なるもの、萬世を通じて常住なるものを求めなければならぬ。佛教に所謂諸行無常のうちに、常住不滅なるものを求めなければならぬ。

最後のよりどころとなる確乎不拔の盤石不易の準則は何であるか。博士は根本通明博士の易の思想を以てこの疑問に答へられる。「易は易、即ち變易であるが、同時にまた不易であり常住である。自然界に於いて之をいへば、天、上に在りて尊く、地、下に在りて卑しく、こゝに乾坤定まる。これ即ち不易である。故に乾坤の二卦を畫して、以て不易の卦としてあるのであつて、是れ即ち君臣父子、定位ありて易ふべからざるの象である。忠孝の道、是に於いてか生ずるのである。易の眼目すでにかくの如くであれば、人倫を明かにし、天下を經綸するに、最も切要なるものは、即ち易なりといはなければならぬ」

と、博士は更に室鳩巢と遊佐木齋を拉し來つて、流轉變化と不